

# 中国の大学院における CLIL を用いた日本語授業と 生きた言語指導の実践報告

:CLILによる社会言語クラスの授業展開と日本語母語学生を活用した生きた言語指導例

東山志帆（上海交通大学）  
張紹帥（上海交通大学）  
李秋雅（上海交通大学）  
林逸鵬（上海交通大学）  
張建華（上海交通大学）

キーワード：CLIL、大学院、実践報告、母語話者学生の活用、生きた言語

## 1. 中国の大学院生が語る中国における日本語学習体験

大学院レベルの高度な学習内容を第二言語である日本語で受講できるまでに至った研究発表者兼参加者である学習者のこれまでの日本語学習経緯、背景についてそれぞれの学習者より発表する。その中で、各学習者がそれぞれの出身地（河南省、遼寧省、広東省）の大学で体験した日本語学習、日本語授業に対する姿勢、予習・復習内容やそれらに費やした時間などについてレポートする。

上海交通大学外国語学院日本語専攻で開講されている日本語科目の授業は全て日本語で行われている。今回の研究対象となる社会言語学の授業もその中の一科目である。授業内で使われるテキストは日本の大学の社会言語学の授業でも使用されるものである。このような教材を使い、発表やディスカッションに至るまで全てを日本語で行うことを可能にしているのは、ひとえに修士学習者の日本語レベルの高さによるものと言える。上海交通大学が国内でもトップレベルの学生が集まる大学であること、さらには日本語専攻の学生が各学年三名と少人数であることなどの理由から、中国国内でも特に質の高い院生レベルの授業展開が可能になっていると考えられる。

現在修士一年に在籍する研究参加者兼発表者である三名は、それぞれ別の大学で学部時代日本語を専攻し学んできた学習者である。中国国内において地域ごとの教育水準の高低差や入学試験の難易度のギャップがたびたび問題視される中、それぞれ別の地域で学んできた学習者の日本語習得バックグラウンドを学習者目線でレポートすることで、中国の高等教育機関における日本語教育の現状理解につながると考える。また、彼らは中国国内においてもトップクラスの学生たちであり、彼らの日本語習得経緯は日本語学習の良い参考例になると推測する。

### 1. 1 西安交通大学での授業と趣味を活かした日本語学習

西安交通大学には日本人の先生が常に五名ほどいた。これは日本語学習者にとって生きた日本語を学ぶ上で非常に恵まれた環境と言える。これらの日本人教員は、基礎づくりである低学年では主に会話、文法、精読、高学年では文学などの授業を担当した。授業の特徴として、一年生の会話の授業では学生がペアを組み、日常のテーマについて話すことを繰り返し行った。二年生になるとロールプレイや、一分間半程の与えられた時間で即興スピーチをさせられ、話の内容や面白さ、論理性から評価された。そして三年生後期になると、文学の授業が多くなった。日本人の先生が文学を教えるメリッ

トとして、文学作品に対する日本人目線の見解を知ることができるという点である。しかし、日本語レベルが比較的低い学生にとっては、内容の難易度が上がることで授業についていくことが困難となる。

授業以外の日本語学習で特に効果的であったのは、日本のドラマ鑑賞である。「趣味は一番の先生」ということわざがあるように、当初日本語が好きではなかった私にとって、初めて日本語と日本に魅力を感じたのは日本のドラマを見た時である。その後、多くの日本のドラマを見る中で、中国と日本の文化の違い、話し言葉における助詞の使い方といった言語的な面について多く学んだ。日本のドラマから授業では学べないことを学び、日本人の生活を知り、同時に語彙の習得や聞き取りの向上にもつながった。

## 1. 2 限られた学習資源の適切かつ有効な活用と、東北大学での討論・発表中心の授業

日本語の四技能の中で、私が特に習得が難しいと感じたのはリスニングである。大学二年生になった頃、私はNHKのニュースを一時間ほど聞くことを日課にした。しかし、初学者だった私が一時間NHKのニュースを見ても理解できた内容は一つあるかないかであった。この間、全くとって良いほど学習の成果は見られなかった。そしてこの間違った勉強方法に気づいた一年後、NHKのニュースを見る事を諦め、日本のドラマを見始めた。ドラマの中で使われている言葉は表現もバラエティー豊かで、生活感のある言語を学ぶことができた。その学習方法を続けて一年で、自分のリスニング能力が飛躍的に向上した。私は長い間NHKのニュースこそ素晴らしい勉強素材であると思い込んでいたが、それよりもまずは、自分のレベルに合った素材を見つけ、楽しんで学ぶことが重要であると感じた。

私の大学の日本語学部は学生の発想力と思考能力を高めることを重視していた。二年生になると講義型授業とプレゼンテーションの授業が半々の割合で構成されていた。さらに三年生になると、与えられた課題について資料を集め、グループ討論をした後に授業で発表する授業が増えていった。この授業からは研究方法はもちろん、日本語で考え日本語で自分の意見を相手に伝える能力の習得に繋がった。また、二年生以降の評価方法が試験ではなく課題提出中心であったことも、詰め込みではなく定着を意識した言語学習ができたと感じる。私の出た大学は日本人の学生や教員が少なく、そのため日本語母語話者と接する機会が少なかった。しかし大学が定期的に文化交流イベントを開催し、日本人母語話者と接する機会を提供してくれた。このようなイベントに参加するたびに、ますます日本文化や日本語が好きになっていき、日本語を勉強することが楽しく感じるようになった。

## 1. 3 華中科技大学で学んだ基礎と、信頼できる日本語教師との出会い

大学時代の日本語学習を振り返ってまず頭に思い浮かぶのが、三年生の時に総合日本語を担当していた先生の存在である。大学一年生はとにかく基礎中心であった。会話や発音が難しいと感じていた頃、日本人の先生がまだ語彙数も少ない私達にロールプレイで会話する練習を頻繁にさせた。この授業は、日本語で思考する能力を磨くために非常に効果的だったと感じる。このような基礎的な授業が二年生まで続いた。そして三年生に上がった時、素晴らしい先生との出会いがあった。教材を使わずとにかくこの授業では、ディスカッション、感想文、ディベート、発表を重点的に行った。毎回の授業でディスカッションもしくはディベートがあり、感想文の課題、そして定期的に発表があった。当時の自分にとっては、地獄のような過酷な授業内容だった。しかし授業で親切に話題を引き出したリ、私たちの発言に対してコメントしたり、感想文を丁寧に添削したりする先生見ていたら、心からありがたく感じ自分も頑張ろうという気持ちになった。この授業のおかげで会話力も付き、複雑な文法が使いこなせるようになったことを改めて実感した。それに伴って、書く力、書面での表現力も身

に付いた。一、二年生時の基礎がなければ三年生で受けたこの授業には付いていけなかつただろうと思うと、これまでの言語学習を振り返り、改めて基礎の大切さを実感する。

## 2. 大学院における CLIL を用いた日本語授業の実践報告

日本では近年盛んに CLIL が提唱されているが、中国ではすでに四十年前から第二言語指導の場で CLIL が用いられていた。ここでは、上海交通大学外国語学院日本語専攻修士課程の授業で CLIL を用いた社会言語学クラスの実践報告を行う。非目標言語環境下において、学習者の学術的コミュニケーション能力をいかに高めるかは、大学院の言語教育の中でも大きな課題である。これまでの中国の大学では知識吸収を中心とした講義型授業が多く、学習者の思考力や表現力の養成には物足りなさを感じる。しかし、国際化が進む現代社会においては学術的コミュニケーション能力が求められており、大学院教育では学習者の思考能力や表現力を高めるための指導が重要となってきた。筆者はこれまで数年間、CLIL 教授法を用いて大学院の言語学の授業を行ってきた。学習者からも高い評価を受け、さらには彼らの実践的な学びにつながっていることを実感する。ここでは大学院の社会言語学の授業で CLIL 教授法を用いた例を紹介する。

今回紹介する社会言語学の授業では、個人作業、ペアワーク、プレゼンテーション、ディスカッションといった様々な授業形態を通して、学習者にアウトプットの機会と学生同士のインターアクションを増やすことに重点を置いた。それによって、発表内容への理解を深めるとともに、学習者の思考力と表現力を高めることにもつながった。行った授業の手順は以下の通りである。

1. 学習者の興味関心を事前に調査し、それらの内容に沿ったテキストを学習者と共に選定する。
2. テキストのチャプターごとに担当者を決め、担当者はテキストの内容の語句の意味や発音について事前に調べ、授業当日、学習者に注意点として伝える。
3. 学習者は必要に応じて他の文献を用意し、担当箇所をまとめ、プレゼンテーションを行う。適時、他の学習者は内容について質問し、担当者が答え、教師が補足説明をする。
4. 学習者はプレゼンテーション後、内容に沿って理解を深めるための質疑応答が行われる。または、教師からは思考問題が提示され、それについてクラス全体でディスカッションを行う。これらを通し、学習者は積極的に日本語で自分の考えたこと、言いたいことを日本語で表現し、コミュニケーション能力を身につけるようになる。

## 3. 授業に日本語母語学生を活用した「生きた日本語」の指導例

本研究の二つ目のテーマである「生きた日本語」に焦点を置いた授業への試みとして、日本語母語話者の聴講生を活用した実践例について報告する。今年度の修士課程の社会言語学クラスで、日本語母語話者の博士学生を聴講生として授業に参加させた。これが結果的に、学習者にとって様々な面で良い影響をもたらした。主な効果として以下の三点が挙げられる。まず、母語話者の学生の存在が、学習者にとって良きチューターのような役割を担っていた。教室内に母語話者がいるという観点から見れば、教員が母語話者の場合も同じような学習環境になると思われる。しかし同じ母語話者であってもその立場が教員と学生とでは、学習者にとって母語話者の役割が違うということがわかった。教員と学習者という関係に比べ、学生である母語話者の立場が学習者と近いことから、本来教員にしないような些細な質問でも母語話者の学生に気軽に聞くことができることができる。これは学習者にとって非常に心強いことである。

第二に、教室も含め第二言語学習者のみで行われる授業に比べ、授業内における日本語でのインタラクションがより生きた日本語で行われるようになった。CLILで授業が行われる場合、授業内の言語は目標言語で行われる。第二言語話者同士の会話では、文法や語彙の使い方が間違ってもそのまま訂正されず、または気づかないまま過ごされることが少なくない。しかし、気軽に質問できる母語話者が教室内にいて、ディスカッションや発表、質疑応答の場において学習者は自分の不安な表現や発音について、その場ですぐに確認することができる。また、母語話者の発話からも学習者は語彙、発音、言い回しなど多くの面で目標言語を学ぶ。これらによって、授業内の学習者の会話が母語話者同士の会話に近づいたと言える。

第三に、母語話者の学生がクラス内にいることで、授業内容の質が上がり、また教材のさらなる理解につながった。今回対象となった社会言語クラスでは、日本の大学の社会言語クラスでも使われているテキストを使用した。テキストの内容も、日本の社会や地理を知らないと理解できない箇所が多数あり、学習者はインターネットや他の文献をもとにそれぞれの発表の準備を行った。しかし、テキストも含め、集めた情報の信憑性や一般性、また使われている言語使用例などが最新であるかどうかまでは、なかなか調べるのが難しい。そこで、平日頃日本のニュースやテレビ番組、インターネットを通して日本社会の情報についてアップデートしている母語話者学生の意見や見解は、ディスカッションや質疑応答においても非常に参考になった。母語話者目線の問いや考え方は、中国人の学習者にとって新鮮で学びも多かった。

言語のクラスにおいては、母語話者や教員よりも語学力がある学生がクラス内にいると、教室内の教師と学習者のバランスを崩しかねない。また、教師の教室内における教員のオーソリティーを脅かす原因になることもある。しかし、教師がうまく日本語母語話者である学生を活用し、微妙な日本語表現のニュアンスや、文語的表現や死語化した日本語の自然な表現への言い換えについて助言を求めたりする中で、日本語学習者が授業の中でより生きた日本語を習得することにつながった。学習者の発話に関して同じ学生という立場からアドバイスできるので、学習者は間違いを指定されたというよりも、自然と間違いを修正することができた。さらには、教科内容である日本の社会言語に関しても、日本語母語話者で日本社会に精通している母語話者学生の貢献は大きく、学習者はさらに多くの言語使用の実例に触れることが可能となり、日本語母語学生の起用はコンテンツ指導の部分においても授業のレベルアップに繋がった。

#### 参考文献

- 佐藤雅彦, 宮本律子(2014)「CLILを用いた日本語教育の試み -中級読解・作文クラスでの事例-」,『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』, 36, 秋田大学.
- Aguilar, M., & Muñoz, C. (2013). The effect of proficiency on CLIL benefits in Engineering students in Spain. *International Journal of Applied Linguistics*. 24.
- Brown, H., & Bradford, A. (2017). EMI, CLIL, & CBI: Differing approaches and goals. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Transformation in language education*. Tokyo: JALT.
- Pak, M. (2017). CLIL of Language-Culture Integrated Education for Improving Ability to Japanese Communication: Comparison of The 2009 Revised Korean National Curriculum and CLIL Theory. *Doshisha Daigaku Nihongo, Nihonbunka kenkyu*. (15), 127-149.